

ガリシア語の人称不定詞の構造

A Estrutura do Infinitivo Persoal en Galego

浅 香 武 和

Takekazu ASAKA

はじめに

イベリア半島北西部のガリシア語には、ポルトガル語に見られるように特別な発達をとげた不定詞がある。この不定詞は、主語の人称および数に応じて変化するので、一般に、「人称不定詞」(Infinitivo Persoal)¹⁾と呼ばれている。祖語のラテン語においても、他のロマン諸語においても、不定詞の人称変化はない。

人称不定詞は、13世紀頃に遡るガリシア地方の文献に初めて現れ、中世期の公文書や抒情詩集によって確かめられる²⁾。

筆者は、人称変化しない不定詞 (Infinitivo non Persoal) とちがって、人称変化する不定詞という興味ある事実に注目し、ガリシア語においてどのように用いられているか明らかにしてみたい。

I 人称不定詞の形態とその起源

人称不定詞の形態は、REAL ACADEMIA GALEGA e INSTITUTO DA LINGUA GALEGA : *Normas Ortográficas e Morfolóxicas do Idioma Galego*. Vigo, 1982. によれば、つぎようになる。³⁾

人 称	人 称 語 尾	第 一 活 用	第 二 活 用	第 三 活 用
p ¹	∅	<i>falar</i>	<i>comer</i>	<i>sentir</i>
p ²	-es	<i>falares</i>	<i>comeres</i>	<i>sentires</i>
p ³	-∅	<i>falar</i>	<i>comer</i>	<i>sentir</i>
p ⁴	-mos	<i>falarmos</i>	<i>comermos</i>	<i>sentirmos</i>
p ⁵	-des	<i>falardes</i>	<i>comerdes</i>	<i>sentirdes</i>
p ⁶	-en	<i>falaren</i>	<i>comeren</i>	<i>sentiren</i>

こうした人称不定詞の形態に至った起源については、つぎのような4つの説がある。

- 1) 接続法未来の人称変化に起源を求める説。
- 2) ラテン語の接続法未完了過去に由来すると見る説。
- 3) 「主格+不定詞」の構成から成立したとする説。
- 4) 接続法未来と不定詞の混同によって「主格+不定詞」の構成のなかに、人称語尾を付加して創出したとする折衷説。

このように、人称不定詞の起源は定かでないが、現にガリシア語において用いられているので、その用法を詳しく調べることによって、人称不定詞のしくみを解き明かすことができると考える。

II ガリシア語の人称不定詞の用法

人称不定詞の用法について、従来、一般に認められている説明では、明らかにすることのできない事実があり、これまでの視点とは異なる方法で分析する必要がある。このため、ガリシア語の新しい資料から用例を抽出する。

スペインにおいてフランコ政権以後、初めて発行された新聞の記事と、中等教育で使用されている教科書を資料にする。

- 1) A NOSA TERRA : Periódico Galego Semanal, Vigo. N. 8 (17 de marzo de 1978), N.240 - 289 (22 de febreiro de 1984 - 27 de marzo de 1986)
- 2) Enríquez Salido, María do Carmo et al. : *Língua e Cultura de Galiza*. A Coruña, 1982, 477 pp.

従来の研究としては、Sten (1952) および、Gondar (1978) が知られている。筆者は、これらの研究成果をふまえながら、人称不定詞の用法を1～14に分類し、検討する。⁴⁾

1. 状況補語に用いられる人称不定詞

前置詞を伴う不定詞が支配動詞の状況補語になり、人称変化するばあい。前置詞により人称不定詞のはたらきを1)～7)に細別する。

1) 目的節において、前置詞 *para* を伴う不定詞が人称変化する場合。

a. 支配動詞の主語と人称不定詞の主語が同じとき。

1) - 1. 不定詞節が支配動詞 (*podedes empregar*) より先行するとき、不定詞の主語を明示するために不定詞を人称変化させる。

1. *Para realizardes este esquema podedes empregar chaves ou números.* (*Língua e Cultura*, p.247)
(君たちは、この問題を解くために〔下欄の〕ヒントを利用しなさい。)

1) - 2. 支配動詞 (*serviran, serven*) と不定詞節が隔たるとき。

2. *Todos eles serviran e serven á prensa reaccionária e aos comentaristas subvencionados para tensaren o arco dos ataques á revolución popular de Al-Yamahiriya e da sua caheza visíbel.* (*A NOSA TERRA*, 250)

(アル・ヤマヒリヤと側近の者による人民革命に反抗するために、彼ら全員は保守的な新聞や補助を受けた論説者たちに仕えたし、また現に仕えている。)

1) - 3. 人称不定詞に再帰代名詞 *se* を伴うとき。⁵⁾ つぎの例は、相互的な表現を示す。

3. *Para se entenderen, axudaren e defenderen van xuntos os mesmo país.* (*Língua e Cultura*, p.50)
(互いに納得し、助けあい、さらに身を守るために、同じ国の人々が一体になる。)

1) - 4. 支配動詞の主語が無人称(不定詞、現在分詞)で、確立してないとき。

4. *Grabar o poema e escoitar depois a grabazón da vosa própia voz para facerdes logo auto-críticas.* (*Língua e Cultura*, p.260)

(君たちは、後で自己評価するために、詩を録音し、つづいて自分の声で録音したものを聞くこと。)

1) - 5. 人称不定詞が叙述補語をもっとき。

5. (...), *que, a sua vez e para seren admisíveis, ainda deberian axustar-se a toda unha série de requisitos adicionais.* (*Língua e Cultura*, p.343)

(それはそれとして、認めるために、なお一連の付加的な必要条件にあわせるようにするべきである。)

1)–6. 不定詞の主語が先行し、つぎのように構成される。支配動詞 (pousen) + 主語 (os mesmos l. c. títulos) + 前置詞 (para) + 人称不定詞。

6. Por iso fala-se deunha rede urbana bipolar xa que A Coruña e Vigo pousen os mesmos 《títulos》 para recabaren esa capitalidade que, ... (Língua e Cultura, p.366)

(すなわち、ア・コルーニャとビーゴが、その首都的性格を出すために、同じ名称をつけようとする計画があるからには、二極都市網について話される。)

1)–7. 表現の上で必要なとき。

つぎの例文で、empezarmos と organizarmos は主語の機能を果す人称不定詞であり、前置詞 para + 人称不定詞 conquerirmos は、複数 1 人称の主語を強調して表現される。

7. Empezarmos a traballar e organizarmos para conquerirmos a equiparación co Ensino Estal baixo o presuposto do pago directo do salario pola administración pública nos niveis que estexan subvencionados. (A NOSA TERRA, 247)

(補助金を受けているレベルで、公共行政による給与の直接支払いの予測に立って、平等な国家の教育を我々は獲得するために組織づくりをし、活動しはじめる。)

次の例では、para que をとるときは接続法複数 3 人称 (interviñesen) が現れ、前置詞 para をとるときは人称不定詞 (perderen) が現れる。

8. Ante esta disxuntiva, optaron por facé-lo eles para que non interviñesen axencias estrañas á parróquia e para non perderen parte dos seus dereitos tradicionais sobre os montes. (Língua e Cultura, p.364)

(この分離を考えると、数区に妙な動因が起らないように、また山に関する旧来の権利の一部を失わないように、彼らはそうすることにした。)

b. 支配動詞の主語と人称不定詞の主語が異なるばあい。

1)–8. 人称不定詞の主語が、コンテキストでわかるとき。

9. Previase aínda o alargamento da educación universitaria, o recurso ao envío de estudantes para especializaren no estranxeiro e a erradicación do analfabetismo no. 1980 (A NOSA TERRA, 250)

(大学教育の延長、国外で専門分野を研究する学生の派遣、および 1980 年における文盲の解消方法を今まで準備していた。)

1)–9. 人称不定詞の使用が、不定詞の主語を明白にしたり、または強調するようばあい、人称不定詞は複数 1 人称として現れる。このような人称不定詞の用法は、話者の意向が文法的規則より重視される傾向にある。

10. Mais ao noso xuício até agora non se deron os pasos necesarios para avanzarmos no desenvolvemento do esquema industrial que desexamos. (A NOSA TERRA, 246)

(しかし、我々の判断では、今日まで我々が望んでいる工業体系の発展に前進するために必要な事業は起らなかった。)

2) 時を表す副詞節に用いられる人称不定詞。Ao (前置詞 + 定冠詞), ó (前置詞 + 定冠詞の縮約形)

のあとに不定詞をとり、人称変化するばあい。

a. 主語 (elas) が明白で、支配動詞 (despertaron, tomaron) の主語と人称不定詞の主語が同じばあい。

11. E elas despertaron, e tomaron moito medo *ao verem* o rio pola sua porta, e con isto, saíron correndo como ánimas en pena sen que as vise Roldán, ... (Língua e Cultura, p.197)

(そして彼女たちは目を覚し、戸口に河を見たとき、大変怖がった。すると、ローランに見られずに、悲しみにしずんだ精のように走りさった。)

b. 主語 (os povos céltigos) は明白であるが、支配動詞 (significa) と人称不定詞の主語が異なるばあい。

12. *Ao entraren* os povos céltigos outra vez na vida activa da história, significa desde logo a definitiva deslocaçón do centro de gravidade do mundo, ... (Língua e Cultura, p.58)

(歴史の活動的な生命に、ケルト民族が再び入って来たとき、世界の重心はただちに決定的な転位を示す。)

c. 支配動詞の主語と人称不定詞の主語が異なるが、コンテキストがわかるばあい。

次の例は、不定詞 (destacar) が主語となり、人称不定詞の主語は、apoiar の直接目的語 vos である。

13. Destacar estes aspectos para logo apoiar-vos neles *ao facerdes* a redacçón. (Língua e Cultura, p.251)

(君たちが編集するとき、すぐに君たちを支援するために、これらの点をひき立たせること。)

d. 不定詞節が先行するばあい。人称不定詞の主語と支配動詞の主語は同じ。

14. *Ao viviren* de cheo a contradicçión entre o pobo do que se procede e a cultura imperialista, contentan primeiro o colonialismo? (A NOSA TERRA, 8)

(自分の出た国と帝国主義の文化のはざままで、矛盾に満ちて生きるとき、最初に満足するのは植民主義か。)

e. 不定詞節が文中に介在するばあい。次の例は、人称不定詞の主語 (as follas e polas) が先行し、支配動詞 (levan) の直接目的語である。

15. Isto debe-se a que as follas e polas, *ao caíren* ao chan, leván para desfacer. (Língua e Cultura, p.223)

(地面に落ちた葉っぱと枝を取り除くことが、時間を費やす原因である。)

f. 支配動詞 (se forman) の主語 (os querirugais) と人称不定詞の主語 (as brañas) が異なり、支配動詞と人称不定詞が連続するばあい。

16. Algo diferente son os queirugais que se forman *ao iren* secando as brañas. (Língua e Cultura, p.223)

(牧草がだんだん乾いていくとき、かしの木が成長するのはいくぶん異なる。)

g. 他の前置詞、前置詞句によって導かれ、時を表す副詞節に人称不定詞が用いられるばあい。

17. (...) por non firmar ese convénio e continuar coa folga convocada *até conquerirmos* as nosas reivindicacións. (A NOSA TERRA, 247)

(我々の取り戻し請求を獲得するまで、その協定に調印せず、ストライキを続行する。)

18. *Antes de facerdes* o comentário debes ler e comprender a mensaxe do poema. (Língua e

Cultura, p.169)

支配動詞 (debedes) と人称不定詞の主語は同じ。

(君たちは論評する前に、詩の内容を読みとるべきだ。)

19. Esta proposta de Governo chegou *depois de non teren aceptado* unha primeira, que foi negociada en Madrid por UGT. (A NOSA TERRA, 254)

(第一案が廃棄された後で、政府の建議は決まり、マドリードで労働同盟によって取り決められた。)

支配動詞 (chegou) と完了の人称不定詞の主語は異なる。

3) 原因を表す副詞節に用いられる人称不定詞。前置詞 *por* によって不定詞が導かれるばあい。

20. *Por non saberen* “labrarse un por venir” ou non estar dispostos a levar un tipo de vida semellante á sua? (A NOSA TERRA, 242)

(「未来をつくろう」ということを知らず、またその生活に似たタイプの生活をはじめようとしなないのはなぜか。)

人称不定詞が先行し、状態動詞 *estar* は人称変化せず叙述補語をとっている。

21. *Por faceren mal*, non serán amigos nosos. (Língua e Cultura, p.51)

(彼らは悪戯をするので、我々の友人ではなくなろう。)

不定詞節が先行し、人称不定詞と支配動詞の主語は同じ。

4) 様態を表す副詞節に人称不定詞が用いられるばあい。前置詞 *sen* によって不定詞が導かれ、様態または単に付随的な状況を表す副詞節に、人称不定詞が用いられるとき。支配動詞および不定詞により指示される行為は、同時性を表す。

22. *Sen irmos máis lonxe*, aquí, “chez nous”, hai ben de espermentos ao noso redor. (A NOSA TERRA, 246)

(ここ、すなわち「我々の家」からそんなに遠くに行かない所に、よくおぼけが出る。)

5) 譲歩を表す副詞節に用いられる人称不定詞。前置詞 *con*、または *pra* によって不定詞が導かれ、副詞節に人称不定詞が用いられるばあい。副詞節に、このタイプの例が現れるのは少数である。

23. Hai muita xente que se opón pasivamente a un avance cara o socialismo e, por suposto, non se trata de eliminala fisicamente, *con seren* un obstáculo. (A NOSA TERRA, 242)

(社会主義に向う前進に消極的に反対する人々がいる。もちろん障害であるが、物理的にこれらの人々を排除することではない。)

6) 条件を表す副詞節に用いられる人称不定詞。前置詞 *de*、または *de* を含む前置詞句によって導かれる不定詞に、人称不定詞が用いられるばあい。

24. A verdade é que a fouce e o martelo poderían quedar marcados no corpo das vítimas de homen de “esquerdas”, *de teren* estes tanto apego aos símbolos como esa nova xuventude hitleriana. (A NOSA TERRA, 246)

(新青年ヒトラー主義者と同じように、鎌とハンマーをシンボルにして執着するならば、「左翼」の犠牲者の体に、そのしるしがあるのは当然だ。)

25. *Con tal de irmos á festa*, non preocupamos polo demais. (Língua e Cultura, p.51)

(私たちが祭りに行くならば、他の者を気づかう必要はない。)

7) 他の前置詞句によって不定詞が導かれ、状況補語になるとき、副詞節に人称不定詞が用いられるばあい。

26. Mas, *a forza de sermos* sinceros, devo confissar que . . . (A NOSA TERRA, 270)

(しかし、私たちが誠実であるために、私は告白しなければならない。)

27. (. . .) que se dedican a maldizer a injuriar contra CXTG *en vez de fortificaren* eles o seu sindicato, . . . (A NOSA TERRA, 285)

(彼らは自分の組織を強化するかわりに、中央労働同盟に対して悪口、かつ侮辱しようとする。)

2. 主語の機能を果す人称不定詞

不定詞の主語を明白、または強調するとき、人称代名詞をとらず、人称不定詞が用いられるばあい。

28. *Sentirmos* obreiros dun facer comun; labregos dunha leira que é de todos e non eido personal de ningún. (A NOSA TERRA, 255)

(共同作業の労働者たちを私たちは気の毒に思う。というのは、村人の耕地は全員のものであり、個人土地ではない。)

さらに、この用法は *comprir* (～が必要である)、*convir* (～に適する) などの単人称動詞(単数3人称)が人称不定詞をとるばあいもある。

29. *Cumpre citarmos* o traballo xeral, fundamentalmente de biblioteca, de Estefania Alvarez ou mais asisados e concretos de G. Arias Bonet. (Língua e Cultura, p.35)

(基本的に、図書館、エステファニア・アルバレス、それとも賢明で具体的なG・アリアス・ボネの業績を我々は表彰する必要がある。)

3. 実詞の補語に用いられる人称不定詞

実詞の限定補語に、前置詞 *de* をとり不定詞が導かれ、人称変化するばあい。この用法において、人称不定詞が用いられる可能性は高い。

a. 支配動詞の主語と人称不定詞の主語が同じばあい。

30. O inventor de esta especie foi Fermín Buoza Brey, quen escribiu en 1935, na revista “Nós” estas verbas desafortunadas que tiveron *a desdita fortuna de se convertiren* en lugar común; . . . (A NOSA TERRA, 249)

(この種の提案者は、フェルミン・ボウサ・ブレイであった。彼は公共の場に不幸をもたらした不運なことばを1935年に雑誌「我等」に執筆した。)

b. 支配動詞と人称不定詞の主語が異なるばあい。

31. *É unha maneira de nos defendermos*. (A NOSA TERRA, 286)

(我々が身を守る一つの方法である。)

32. *Ese era tamén o motivo de estaren* a pé os rapaces deica as doce para poder comé-las, . . . (Língua e Cultura, p.401)

(それは、甘いものを食べることができるよう、少年たちが歩いていく理由でもあった。)

4. 形容詞の補語として、前置詞 *de* を伴う人称不定詞。

33. (. . .), e alguns son *capaces de abandoaren* os seus postos de honor. (A NOSA TERRA, 249)

(そして、ある者たちは名誉ある地位を放棄しかねない。)

5. 支配動詞の直接補語として、人称不定詞が用いられるばあい。

34. (...) e neste senso *coidamos* conveniente *empezarmos* a unir as nosas forzas cara a posíbel negociación dun Convénio. (A NOSA TERRA, 247)

(そして、この思慮で協約を取り決めできる方向に我々の力を統一しようとするのが相応しいと思う。)

35. (...), *esixen reiterarmos* postulados e raciocinios elementais, ... (A NOSA TERRA, 274)

(我々が基本的な条件や推論を繰返すことを彼らは要求する。)

一般に、支配動詞と不定詞が緊密な位置にあるばあい、人称不定詞が用いられることは少ない。ここであげた最初の例文は、支配動詞 (*coidamos*) と人称不定詞 (*empezarmos*) の主語は同じである。このばあい、すでに支配動詞の屈折語尾によって主語は明示されているので、不定詞の人称変化は補足説明と考えられる。

第二の例文は、支配動詞 (*esixen*) の主語と人称不定詞 (*reiterarmos*) の主語は異なる。この場合、*que* + 定形動詞の表現をとることができる。これはスペイン語の統辞法が影響したとみられる。次の例文によって確かめられる。

36. O abeizado pensa *que teñen* un xeito de falar incríbel e ... (A NOSA TERRA, 255)

(坊さんは、彼らが信じがたい話しぶりをすると、考えている。)

6. 叙述補語に用いられる人称不定詞

Deixar, facer, sentir, ver などの使役・感覚動詞の直接補語として、叙述補語になり人称不定詞をとるばあい。この用法は、本来、人称変化しない不定詞をとるのが普通である。現代スペイン語の統辞法の影響により、人称不定詞の機能を拡大するに至った。

スペイン語では、次のように不定詞をとるか、*que* によって定形動詞(接続法)を導く構造をなす。

37. Mandé *salir* a los niños.

37a. Mandé *que saliesen* los niños.

(子供たちに外へ出るよう、私は命じた。)

7. 帰結補語に用いられる人称不定詞。 *Axudar, obligar* などのある行為を誘発、助長、強制を意味する動詞が間接補語に不定詞をとる時、前置詞 *a* を伴い人称不定詞を用いる。

次の例文では、人称不定詞 (*aprenderen*) の主語は、 *axudará* の間接目的語 (*lles*) である。

38. (...) *ten* como alicerce as tradicións e un laborar arreo *que lles axudará a aprenderen* empiricamente o seu oficio. (Língua e Cultura, p.298)

(彼らが自分の仕事を経験的に習得しようとするのを助けてやるのに、基礎として、しきたりと飾り細工の仕事を与える。)

8. 前置詞付き補語に人称不定詞が用いられるばあい。不定詞が、直接または間接に支配動詞 (*esmeraron-se*) に依存する時、前置詞 (*en*) を伴って補語の働きをする。

39. (...) *esmeraron-se*, para dar grácias á Maxestade Divina, *en concederen* en calidade feudo libre grande parte das xurisdizóns, terras e cotos deste Reino, ás Igrexas e Mosteiros. (Língua e Cultura, p.100)

(神聖な神に感謝するために、管轄区域、王の領地の大部分を自由な領土として、教会や修道院に譲

渡すように彼らはつとめた。)

9. 同格補語に用いられる人称不定詞

主動詞 (*queremos*) と人称不定詞の主語は同じで、同位構文をとる。

40. *Queremos convivir nelas democráticamente e (...), sermos motor dun pobo en marcha cara un norde e un horizonte definidos e explicitados.* (A NOSA TERRA, 269)

(我々は、民主的にそこで一緒にくらしたいし、北方へそして決められた地域へ進展する民族の原動力になりたい。)

10. 名詞的補語に用いられる人称不定詞

不定詞が定冠詞 *o* を伴い、名詞的に用いられ、不定詞が人数変化するばあい。

41. (...) *se algo caracteriza aos candidatos é o seren políticos españoles.* (A NOSA TERRA, 8)

(もし、候補者たちに何か特色があるとすれば、それは彼らがスペインの政治家たちであるということです。)

11. 不定詞が現在分詞と等しい働きをする時、人称不定詞を用いるばあい。

現在分詞と等しい働きをする不定詞の用法は、ガリシア語の特徴を示すものであり、次のような構成をとる。*Andar, estar* などの助動詞の機能を果す定形動詞 + 前置詞 *a* + 不定詞。人称不定詞を用いるのは、主語を強調する表現的要求である。

42. *Estamos a quedarmos sen primavera neste pluvioso 1984, razón pola que xuño ofrece a derradeira oportunidade de sementar cultivos de verán e de outono.* (A NOSA TERRA, 247)

(6月には夏と秋に栽培する種をまく最後の機会なので、この雨の1984年は、春がないことになる。)

43. *Pensades que os galegos poden seguir andando polo mundo a ofereceren indignamente a mercancia dos seus lombros e dos seus brazos?* (A NOSA TERRA, 249)

(ガリシア人たちが、両肩、両腕にもった商品をいたる所でいやしく売り続けているのを君たちは考えられるか。)

この用法において、不定詞が様態の状況補語の働きをする時、人称不定詞が用いられることもある。

44. (...), *nas ribeiras do Ulla, cuxos viciños cultivaban un trozo do monte parroquial, para destinaren o produto da colleita a sufragaren o gasto das festas do San Ramón.* (Língua e Cultura, p.364)

(ウーラの海岸地帯では、村人たちはサン・ラモン祭の費用に収穫物をあてるために教区の一部を耕していた。)

45. (...), *e a tendencia dos ions a saírense do confinamento naquelas partes máis estreitas, neutralízase por aneis electróns.* (A NOSA TERRA, 255)

(そして、イオンの性質はより緊密な部分の境界から逸脱しながら電子の輪に中和化する。)

前置詞 *a* を伴い現在分詞と等しい働きをする人称不定詞の構成は、ガリシア語史のなかで比較的あたらしい時期に創りだされたと考えられる。前置詞付き不定詞とは、その機能は異なり、中世ガリシア語において、前置詞 *a* に導かれた人称不定詞は、「現在分詞的不定詞」と言うより、むしろ、状況補語の目的を表す人称不定詞と思われる。

46. (...) na font'abeveraron seus cavalos a *beveren*, (Cantigas de Santa María, 344)

(泉で、自分の馬に水をのませるために彼らは〔水〕を与えた。)

12. 助動詞に依存する人称不定詞

a. 様態の助動詞+人称不定詞 ; *querer, poder, deber* などの動詞に人称変化した不定詞が続くばあい。

47. Desde Fonte Miña deica a Guárdia, o rio tende-se no seu canle como nós *poderíamos tendermo-nos* nun prado. (Língua e Cultura, p.189)

(フォンテ・ミーニヤからグアルディア河に向けて、我々が牧場を広げるように、河は流域を広げる。)

b. 迂言的な意味を表す助動詞に前置詞を伴って人称不定詞が用いられるばあい。

Comezar a ~, chegar a ~, ter de ~ などに不定詞が続き、人称変化するばあい。

48. Os rebaños dun Proteu case infindo enchen as paisaxes mariñeiras da Galiza, e *chegan* en moitos casos a *seren* causa de modificazón do elemento xeolóxico da paisaxe. (Língua e Cultura, p.259)

(ほとんど限りなく広がるプロテウの牧群は、ガリシアの海辺に風景をみだし、多くの場合、景色を変える地理的要因になる。)

13. 比較を表す語に導かれる人称不定詞

同等、優等、劣等などの比較級のなかで、比較の対象となる不定詞の主語を明白に表現する時に人称不定詞が用いられるばあい。

筆者が調べた現代ガリシア語の資料からは、一例も見いだすことはできなかった。Gondar (1978 : 101~102)も、中世の資料から三例を確認しているにすぎず、現代ガリシア語においても使用されることは少ない、と述べている。

次の例は、筆者が中世ガリシア語の資料から確認したものである。

49. Prol sua nunca fezeron/ omes *como nos faremos*
en fazer voso mandato,/ *en demais que seeremos*
vos qu' en asesegamento,

(Cantigas de Santa María, 386)

14. 他の用法

疑問文、感嘆文、関係詞節において、定形動詞を用いず、人称不定詞が使用される場合がある。話者が主観的な理由により、主語を表そうとする時、不定詞の主語がコンテクストに示されない場合に人称不定詞が用いられる。

50. *Deixaredes-me embarcar!* (Língua e Cultura, p.94)

(私を船に乗せといて)

51. Os primeiros, para fundaren morgados e capelanias, *con que manteren* o seu estado económico e social, ... (Língua e Cultura, p.97)

(長子相続制と司祭職を設けるために、その経済的かつ社会的身分を維持する最初の者は、...)

次にあげる例は、中世ガリシア語において関係副詞節に用いられている人称不定詞である。

52. Por en quero retraer/un miragre que oí,
 ond'averedes prazer/oyndo-o,
 (Cantigas de Santa María, 56)

Ⅲ これまで述べてきた人称不定詞の用法を先の資料によって統計的に示すと、次のようになる。

用 法	資 料	A NOSA TERRA	Língua e Cultura
1. 状 況 補 語		143 (68%)	82 (77%)
1) 目 的		54	37
2) 時		36	24
3) 原 因		20	9
4) 様 態		7	8
5) 譲 歩		7	0
6) 条 件		10	3
7) 他 の 前 置 詞 句		9	1
2. 主 語		15	2
3. 実 詞 補 語		10	7
4. 形 容 詞 補 語		2	0
5. 直 接 補 語		5	2
6. 叙 述 補 語		0	0
7. 帰 結 補 語		0	1
8. 前 置 詞 付 補 語		10	2
9. 同 格 補 語		2	0
10. 名 詞 的 補 語		3	0
11. 現 在 分 詞 に 等 価		7	2
12. 助 動 詞 に 依 存		13	6
13. 比 較 語 に よ る		0	0
14. 他 の 用 法		0	2
合 計		210	106

おわりに

現代ガリシア語における人称不定詞の用法は、統計の上から統辞論での制約があると考えられる。

基本的には、前置詞に先行された不定詞で状況補語の働きをする場合、とくに目的節において使用頻度が高い。状況補語の働きをする副詞節では、不定詞構文が現れやすく、支配動詞より不定詞が先行する場合、人称不定詞をとることにより主語を明白にする意味上の手段である。支配動詞と不定詞が共通の主語をもち、両者の連合関係が密接であれば、人称不定詞の使用頻度は低くなり、支配動詞と不定詞が異なる主語をもち、両者が隔たる場合は人称不定詞の使用される可能性は高くなる。

スペイン語の統辞法が影響して、人称不定詞の用法が拡大したと考えられるのは、次の場合である。
支配動詞と異なる主語をもつ直接補語の不定詞、現在分詞的不定詞の用法。

註)

- 1) 拙稿, “En torno a la denominación del Infinitivo Personal”, *Lingüística Hispánica*, Vol. 6 (1983), pp.43-54.
- 2) 拙稿, 「ガリシア語史の時代区分の一考察」『大阪府立貿専紀要』第4号(1985) pp. 19-24
- 3) ガリシア語において, 人称(P)は $P^1 \cdot P^2 \cdot P^3$ が単数形 1人称・2人称・3人称, $P^4 \cdot P^5 \cdot P^6$ が複数形 1人称・2人称・3人称をそれぞれ示す。なお, その形態に (P^1) *falare*, (P^3) *falare*, (P^4) *faláremos*, (P^5) *faláredes* の異形も見られる。
- 4) 拙稿, 「ガリシア語の人称不定詞の用法」『言語研究』第87号(1985) p.173.
- 5) 拙稿, 「ガリシア語における再帰代名詞 *se* を伴う人称不定詞」『ロマンス語研究』19(1986) pp. 3~8.

参考文献

浅香武和: 「人称不定詞の進展について」『大阪府立貿専紀要』第3号(1984) p. 20~31.

ASAKA, Takekazu: “Empleos del Infinitivo Personal en Galego Moderno”, *Lingüística Hispánica*, Vol. 6 (1984) pp. 1-22.

Carballo Calero, Ricardo: *Gramática Elemental del Gallego Común*, Vigo, Editorial Galaixa, 1979.⁷

Gondar, Francisco: *O Infinitivo Conxugado en Galego*, Verba Anejo 13, Santiago de Compostela, 1978.

Maurer Jr., Theodoro Henrique: *O Infinitivo Flexionado Português*. Estudo histórico-descriptivo. São Paulo, Editora Nacional, 1968.

Sten, Holger: “L’infinitivo impessoal et l’infinitivo pessoal en Portugais moderne”, *Boletim de Filologia*, Tomo XIII, Lisboa, 1952. pp.83-142, 201-256.

Togebly, Knud: “L’énigmatique infinitif personnel en portugais”, *Studia Neophilologica*, XXVII, Uppsala, 1955. pp.211-218.

Afonso X, O Sábio: *Cantigas de Santa Maria*, Edición de Walter Mettmann, Acta Universitatis Coimbia, 1959-1972.

(9 de Santiago do 1986)